

「甦れ やばけい遊覧」

中津市長 奥塚 正典

市長会の会合で熊本県の玉名市を訪問。夏目漱石ゆかりの「草枕^{くさまくら} 交流館」で館員から「中津市長はいますか」と突然尋ねられました。わけを聞いてみると、漱石は熊本在住時代、本耶馬溪、耶馬溪、山国を訪れており、地元の漱石愛好家グループがその足跡を辿って中津を訪問しよい旅ができたと言うのです。

恥ずかしながら漱石の中津訪問については知りませんでした。あの文豪がいかなる気持ちで中津を訪れ、そして何を思ったかなどを想像すると興味が駆り立てられます。その後東京に戻り小説「彼岸過迄（ひがんすぎまで）」を書き、その中に耶馬溪、羅漢寺の文字が出てくるとなると漱石が身近に感じられ作品をゆっくり読んでみたくもなります。

漱石のほかにも中津は文人話題にはこと欠きません。青の洞門は大正時代のベストセラー、菊池寛の「恩讐^{おんしゅう}の彼方に」。そして平田家からノーベル賞作家川端康成の耶馬溪滞在写真が出てきました。田山^{かたし}花袋は、その名もズバリ「耶馬溪紀行」を執筆しており往時の耶馬溪のにぎわいがよくわかります。このように名だたる文人を引き付けたのがかつての耶馬溪です。

昨年は日本新三景 100 年。来年は頼山陽が耶馬溪と名付けて 200 年。そして、今年は「やばけい遊覧～大地に描いた山水絵巻の道をゆく」が日本遺産に認定されました。まさに城下町中津を含め市内全域をつなぐ数々の景観、歴史、文化、生活模様の物語が改めて高く



評価されました。多くの文人が訪れた耶馬溪が外からの目で大きな魅力ありと実証されたわけです。中津をまるごと情報発信する絶好のチャンス到来。規制が緩和された民泊、増える外国人客や体験型旅行者への対応など時代にマッチした新しい受け入れ努力が必要でしょう。

今こそ「甦^{よみがえ}れ やばけい Newborn YABAKEI!」。